

2月7日 年間第5主日

イザ 6:1～8 Iコリ 15:1～11 ルカ 5:1～11

1. ルカ

v.8 「これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、“主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです”と言った。」

v.10 「すると、イエスはシモンに言われた。“恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。”」

私たちが自分で聖書を読むとき、このようなペトロの恐れを、あたかも自分には関係のない他人事のように、無造作に見過ごしてはいませんか。また人々は、ミサの中で権威を持って聖書の話をする司祭についても、自分自身は何も恐れていない者のように、客観的に福音書の物語りを取り扱っているという印象を感じているのではないのでしょうか。教会にせよ、信者個人にせよ、その宗教的行為や生活が、そこには何も恐れなどないかのように営まれているように見えます。

恐らくルカ福音書は、そのような日常からの飛躍として、真の“恐れ”を、読者である信者やミサで説教を聞く会衆が理解し体験することを期待して、語っています。つまり v.5 ではイエスを“先生”と呼んでいたペトロが、v.8 ではそこから飛躍して“主よ”と叫ぶのです。これは原始教会の信仰宣言である「イエス・キリストは主である」(フィリ 2:11)に用いられる呼び名です。彼はナザレのイエスではなくてキリストに、肉となられた父の独り子なる神(ヨハ 1:14)に目が開いて“恐れた”のでした。神の啓示に出会うとは、そういう体験なのです。

ペトロはこのようにして福音の宣教者、恐らく最初から使徒たちの頭として(教会憲章 19)召されました。彼は「恐れることはない」(v.10)というイエスの言葉を聞いたのです。私たち信者であれ、司教や司祭であれ、自分でそれを語ることは出来ません。神だけが、私たちが学ぶ聖書を通し、ミサで説教される神のこゝばを通して、神の啓示に出会う者たちに“恐れることはない”と語られるのです。

2. Iコリ

v.1 「兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。これは、あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音(それに基づいて現に生活もしている、あの福音／フランシスコ会訳)にほかなりません。」

私たち信者は、これまで確かに福音を“告げ知らされ”、“受け入れ”、“それに基づいて生活”して来ただろうかと考えてみましょう。カトリック新聞では昨年来、“神父燦燦”というコラムが連載されて、たくさんの神父さま方が自己紹介のようなものを書いておられます。興味を持って読んでいますが、これまで一人も御自分の献身が「神の福音のために」(ロマ 1:1)、あるいは「福音を告げ知らせるため」(Iコリ 1:17)で

あるという言い方をしておられません。もちろんそれが含まれていることは当然の前提なのでしょうが、少なくとも第一の主張としては語られていないのです。それが典型的なカトリック神父像の反映なのかも知れません。

この状況は、建前として聖書と説教を大切にせるプロテスタント教会でも、事実上は同じです。そこで、私たち信者が神父や牧師の職務怠慢を非難して、いささかでも問題が解決すると考えるなら、それは全く見当外れなことだと言わなければなりません。ガラ 3:2 から援用すると、次のようになります。“あなたがたに一つだけ確かめたい。あなたがたが霊を受けた(救われた)のは、律法を行った(善良な人間になった)からですか。それとも、(キリストの)福音を聞いて信じたからですか。”

私たち信者が、実際にこれまで福音を“受け入れ、また、それに基づいて生活して”来たかどうか、問われているのです。信者は自分の無知と不信仰を、教導職に責任転嫁して、神の御前で言い逃れることなど出来はしません(ヘブ 4:12-13 参照)。

3. イザ

v.3 「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」

v.5 「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」

v.7 「あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」

v.8 「わたしがここにおります。わたしをお遣わしてください。」

神の啓示の顕現に出会った人は、自分の罪深さを示されて恐れます。その罪を赦して恐れを取り除いてくださるのは、人ではなくて神です。そして人は、自分が聞いた罪の赦しの福音、神の国の福音を弁明する者になります(1ペト 3:15)。聖職位階にある人々は、確かに教会で特別な責任と任務を担っています。しかし福音を宣べ伝えることは、神の民すべてに委ねられた務めであって(教会憲章 30)、専ら教導職だけに全責任を転嫁してはならないのです。

「主の言葉があなたがたのところから出て、……響き渡ったばかりではなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられている……。」(1テサ 1:8) そのような教会をこそ、神に感謝！

ハレルヤ、アーメン。

2月14日 年間第6主日

エレ 17:5~8 Iコリ 15:12~20 ルカ 6:17~26

1. ルカ

教会にとって聖書とは、その歩んでいる実際の時代や状況の中で“現在の神のことは”を聞く、生きた書物です。ただの昔話としてそれを読み、そこから現代の生き方に役立ちそうな何かを汲み取る、そんな参考資料の一つではありません。

マタイでは山上の説教として描かれている伝承が、ルカでは平地での説教になっているだけではなく、ルカの教会の置かれていた当時の具体的な状況を背景にして語られました。「人々に憎まれるとき、また、人の子のために追いつかれ、ののしられ、汚名を着せられるとき、……」(v.22)とは、そのような背景を指しています。その教会は、“貧しい人々”“今飢えている人々”“今泣いている人々”の教会でありました。

ルカの意図やその時代状況とは全く無関係に、これを現代の特定の社会における差別や不公平への挑戦状として読もうとする人々がいますが、それは時代錯誤なことだと言わなければなりません。“貧しい”とは宗教的敬虔のことであり、“今飢えている”“今泣いている”とは、“神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいる”(ロマ 8:23)という意味です(フィリ 3:20-21、IIコリ 5:1-5 参照)。

かつて西欧から我が国に入ってきた“誇り高きキリスト教”は、あたかも“富んでいる”“満腹している”“笑っている”“すべての人に誉められる”理想的な共同体を目指す(神の国を建設する)宗教として、人々に理解されたように見受けられます。キリスト教をそのように理解する人々が、すでに原始教会の時代にもいました。「あなたがたは既に満足し、既に大金持ちになっており、わたしたちを抜きにして、勝手に王様になっています」と、使徒パウロも非難しなければなりませんでした(Iコリ 4:8)。

さて、私たちの属しているカトリック教会の実態は、そして私たち信者一人一人の実感は……と、聖書に照らして考えてみましょう。それともこれは、ただの“参考になる昔話”にしか過ぎないのでしょうか。

2. Iコリ

今から60年ほど前に、新約学者 H.Fuller は“キリスト教は一つの宣言として始まった”と述べて、イエス・キリストにおける神の贖いの行為の宣言(ケリュグマ)こそが、教会の信仰の土台であることを主張しました。使徒パウロがこのテキストで、心血を注いで語っているのはそのことです。今朝の朗読配分では vv.13-15 が省略されていますが、それは単にミサにおける朗読を簡潔にするためであって、決してこの部分が不要だからではありません。いや、むしろ本質的な弁明であればこそ、敢えてくどくどと語っているのです。

v.20 「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂とされました。」

この“復活の福音を宣教する教会”が、当時のユダヤ人社会から憎まれ、排斥され、汚名を着せられた

ということ、聖書は伝えているのです。決して“キリストの福音のため”ではないこの世の社会的な差別や不公平を、聖書は教会の問題としているではありません。

現代の我が国は、基本的人権や信教の自由が保障されている平和な国であって、教会が世の中から憎まれ排斥されるというようなことは稀です。だから、新約聖書はそのままでは今の時代に当てはまらない書物だと、多くの人が考えています。それでは現代の教会にとって、「キリストは死者の中から復活し」という宣教も、ただの昔話になってしまったのでしょうか。驚くべきことに、実際多くの信者たちが“何となく、そのように”思っているとしたら、それこそが原始教会と現代の教会との決定的な違いではないでしょうか。

先のH.Fullerの著書の訳者あとがきで、平野保教授が書いた文章を紹介しましょう。「本書の著者の確信によれば、聖書は“歴史的”文学であって、ここにおいて神が歴史における主役として宣言されている。神のみが歴史に意味を与える。それゆえ、聖書はその全体の前後関係の中で読まれるべきものである。・・・ひとりの著者をその時代から切り離してしまったり、その時代を全体の動きから切り離すのも間違いである。」“復活の福音の宣教”は、古文書の中のただの昔話などではないのです。

3. エレ

このようなテキストを、“呪われた人(救われない人)”と“祝福された人(救われた人)”という、個人を仕分けする基準として読むと、私たちは神のことばを聞き損じてしまうこととなります。

主日のミサで朗読される聖書は、「キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々(=共同体)」(Iコリ1:2)への、まさに福音の宣教そのものであって、共にミサをささげる会衆は、“あなたがた(=共同体)はそれを受け入れ、それに基づいて生活しなさい”(Iコリ15:1)と呼びかけられているのです。この言葉は真実です。「わたしたち(=共同体)の国籍は天にあり・・・」(フィリ3:20/フランシスコ会訳)。

ハレルヤ、アーメン。

2月21日 四旬節第1主日

申 26:4～10 ロマ 10:8～13 ルカ 4:1～13

1. ルカ

四旬節は過越の神秘の祭儀に備える期節です。私たちにとってキリストとは、「御自身の血によって、ただ一度(天の)聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(ヘブ 9:12)神の子なる救い主です。聖書を通してこのキリストは私たちに、その救いの御業を信じる信仰を求めておられます。私たちは典礼暦のこの期節に、今年も新たに「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15)と呼びかけられているのです。

この信仰は、神が今なおその「秘められた計画」のために現に働いておられるという意味での、「時は満ちた」ことを信じる信仰です。「その救いはひとえに信仰を通して与えられる」(ロマ 1:17/フランシスコ会訳)からです。

イエスは荒れ野で悪魔から、人々を説得するに足る奇跡を行うようにと、誘惑されました。人は何かの証拠を示されることによって、論理的に説得されれば、信仰に入ることが出来ると考えたりします。「わたしたちが見てあなたを信じる事が出来るように、どんなしるしを行ってくださいますか」(ヨハ 6:30)という要求を、イエスの時代になってだけでなく、旧約の民も繰り返しました。

悪魔の誘惑をすべて拒否された主イエスは、聖書を通して現代の私たちキリスト者に対して、二ネベの人たちでさえ“しるし”を見て悔い改めたのに、あなたがたは御子の十字架と復活によって成し遂げられた永遠の贖いの“しるし”を理解しないのかと、今朝再び、問いかけておられます(マタ 12:38-42)。

2. ロマ

神が御子の十字架と復活によって成し遂げられた救いの福音を、“語り、説明し、弁明する”ということが、実際にはほとんど口頭でなされていないという実情に、現代のキリスト教界は馴らされてしまっています。ほとんどの信者は、聖伝と聖書によって伝えられて来た福音を、本気で文字通りに受け入れることは現代的ではない、時代遅れなことのようになってしまっています。

ところが少なくとも、カトリック教会は“共にミサをささげる共同体”であって、そこで用いられるミサ典書は実に忠実な使徒継承の産物でありますから、このような現代的な感覚と大きく乖離していることとなります。そして、この事実を公言することは、今はまだタブーであるように見えます。

この“聖書の学び”を執筆している私には、どうしてもカトリック教会の使徒継承が正しく、現実の司祭、奉仕者、そして信者一般の福音理解、聖伝と聖書への姿勢が間違っているように思えるのです。

v.9 「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。」

この短い宣言を正しく理解するために、私がどんな説明を試みるよりも、聖書の中からいくつかの箇所を示すのが良いと思います。ロマ 1:2-4, 6:1-11,23、IIコリ4:14 です。

3. 申

v.10 「わたしは、主が与えられた地の実りの初物を、今、ここに持って参りました。」

なぜ？ その理由が vv.8-9 に宣言されています。

カトリック教会のミサでは、感謝の典礼の“供えものの準備”で、同様の祈りを捧げます。「神よ、あなたは万物の造り主、ここに供えるパン(ぶどう酒)はあなたからいただいたもの、大地の恵み、労働の実り、わたしたちのいのちの糧となるものです。」

それは、今これから始まる、ミサの本質的な出来事(ユンクマン/ミサ p.231)への準備の祈りです。教会の奉獻でもある“奉獻”が、聖別(奉獻文)においてこそ行われるのだと心得る(ユンクマン/同)ことから、この祈りは切り離されてはなりません。

感謝の典礼で“供えものの準備”をすることが、神が御子の血によって成し遂げられた永遠の贖いを指し示す“しるし”として理解されずに、それ自体が独立した一つの典礼行為として仰々しく行われてはならないことを、私たちは vv.8-9 によって警告されているのです。

カトリック教会の四旬節が、「世の罪を贖う御子の奉獻に、私たちが一つに結ばれる」ための、良い準備と訓練、またすでに洗礼を受けた信者にとっては記念の期節となりますように。

アーメン。

2月28日 四旬節第2主日

創 15:5～18 フィリ 3:17～4:1 ルカ 9:28～36

1. ルカ

四旬節は、洗礼志願者にとっても、またすでに洗礼を受けた信者にとっても、人が教会共同体に加えられる唯一の道である洗礼の秘跡について、思いめぐらす期節です。イエスの教えに共感してこれを自分の生活信条とすることと、洗礼によって「新しく創造される」(II コリ 5:17、ガラ 6:15)こととは、全く別なことであって、前者は“主義”であり、後者は“信仰”の事柄だからです。

洗礼によって私たちキリスト者は、闇から光の世界に移されました(コロ 1:13、エフェ 5:8)。ですから信者は“光に照らされた者”(ヘブ 6:4, 10:32)であり、それによって「イエス・キリストのみ顔に輝く神の栄光を悟る」(II コリ 4:6)ことが出来るのです。

今朝の福音書のテキストが物語っているのは、使徒たちから伝えられた証言によって信仰に入るすべての人々への“しるし”であります。終わりの日に来るべきモーセとエリヤへの期待(申 18:15,18、マラ 3:23 = ルカ 9:11)と、贖われた民の間に神の幕屋が建てられて神が共に住むという幻(エゼ 37:27、黙 21:3)が、この物語りを構成しています。そしてこの幻の中で、ペトロ、ヨハネ、ヤコブの三人は“やがて来られる人の子の栄光”(21:27)を垣間見たのです。ペトロがイエスに、「仮小屋を三つ建てましょう」(v.33)と言ったのも、このような終末的な期待によることでした。

しかしまだこのとき、イエスの御業は完成していませんでした。「モーセとエリヤは、……イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。」(v.31) 三人の弟子はこのときはまだ十分に理解していなかったけれども、……「ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかった」(v.33) ……、イエスがその死と復活と昇天によってお受けになる栄光(II コリ 4:6)を、前もって垣間見る特権を与えられました。

ですからこの物語りは、信者が洗礼によって与えられる希望(エフェ 1:18)の確かさの証言として伝えられているのです。それは、今は「暗いところに輝くともし火」(II ペト 1:19)ではありますが、「将来わたしたちに現されるはずの栄光」(ロマ 8:18)を指し示しています。

2. フィリ

洗礼によって誕生したキリスト者は、信仰によって義とされた者(ロマ 3:28, 5:1)、聖なる者たち(フィリ 1:1)、新しく創造された者(II コリ 5:17)です。それは神の御業であって、人間が“そのようなふりをする”ことではありません。残念ながら私たちも、現代の教会におけるそのような偽善をたくさん見て来ました。vv.18-19 が言及しているのは、そのような偽善的行為のことです。

神が洗礼を通して与えてくださる「義と聖と贖い」(Iコリ1:30)は、終末論的に理解すべき概念で、私たちは今はそれを信仰によって、いわば先取りとして、“前もってこれを味わい、これに与っている”(典礼憲章8)のです。教会はキリストの第一の来臨と第二の来臨の間に歩んでいるので、“この今の世”と“来るべき世”の双方に与っています。“信仰によって義とされた”私たちは、今なお「この地上の幕屋にあって苦しみもだえています」(IIコリ5:2)。私たちの義は、“既に”であると同時に“待ち望んでいる”(ガラ5:5)ものなのです。

vv.20-21 「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、……わたしたちの卑しい体(存在そのもの)を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」

3. 創

vv.5-6 「主は彼を外に連れ出して言われた。“天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。”そして言われた。“あなたの子孫はこのようになる。”アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」

「イエス・キリストへの信仰によって義とされる」(ガラ2:16)とはそういうことです。人はそのように福音を“心で信じて”、“口で公に言い表して”(ロマ10:10)、洗礼を受けるのです。そして信者もまた、すでに受けた洗礼を深く思い返して感謝しつつ、四旬節を歩みます。

「聖なる父よ、……御言葉によって私たちを養ってください。信仰の目が清められてあなたの御顔を仰ぎ見ることが出来ますように。」(今朝の集会祈願) アーメン。